保存版

新発売

北海道 開拓おかき

えりも【昆布】

産地の旨い逸品が生きる
こだわりの七日（なのか）おかき。

高級品『日高昆布』――
えりもで採れる昆布は
今でこそその名を全国に知られるが、
その影には、生きるために森を失い、海を失った過去を持つ。
そして、豊かだった海を取り戻すために、
自然と闘った漁師の壮絶なドラマがあった。

蘇った緑豊かな大地。現在も植林はつづく。

手間を売る商品。

実施している。先人の努力と自然の再生の歴史は、半世紀以上経つ現在も、次世代の人々に受け継がれ、この先五〇年、一〇〇年と続いていく。

えりもの昆布は昔も今も一〇〇％「天日干し」。乾燥機も進化を続ける時代に、えりもの漁師たちは頑なまでに「天日干し」にこだわり続ける。そこには太陽の恵みとえりもの強烈な潮風との絶妙なバランスが欠かせないのだ。

六月、「天日干し」に重要な昆布干場（こんぶかんば）の手入れから始まる。そして七月、いよいよ昆布漁。しかし特有の強風のため船による採り昆布漁は約二〇日と短い。そのほとんどが「拾い昆布」と言われ、漁師が荒れる海に腰まで入り抜けた昆布を拾い集める。集められた昆布は家族総出で干場に規則正しく並べられる。

ここからが「手間を売る商品」の所以である。――天候や昆布の乾燥具合を見ては、砂利が昆布に付着しないように微〻

天日干し

受け継いだ情熱を品質で繋ぐ。

妙な加減で昆布を移動させる。乾燥が終わった後は、キズが付かないよう丁寧に拾い集め小屋に保管。その後も、外気に当て、決められた寸法に切り揃え結束しては、また小屋で寝かせたりと作業は休む間もなく続く。さらに集荷に合わせ、昆布の光沢・幅・重さ・傷など見極め一等から五等まで仕分ける"選葉"と言う気の遠くなるような作業が続く。こうして商品になるまで約一カ月もの手間ひまをかけるのだ。

えりもの夏の風物詩。前浜が昆布一色に被われる。

えりも産昆布が「高級品」と言われる品質は、「天日干し」にこだわる漁師の飽くなき努力によって守り継がれた証だ。その影には、半世紀にも及ぶえりもの漁師の苦しみと挑戦の歴史がある。そして、それは世代を超えて確実に人々の心に刻まれている。

この海と、この風と共に生きていくために、現在も植樹はつづく。（写真提供／えりも町）

緑が美しい襟裳岬の風景。

北菓楼

◎通販・カタログのご請求、お問合せ フリーコール 0120-89-39-25（ばく・さく・にこ） 9:00～17:00 日曜日・祝日は休み www.kitakaro.com

生きるために木を植えた漁師たちの五十年の闘い。

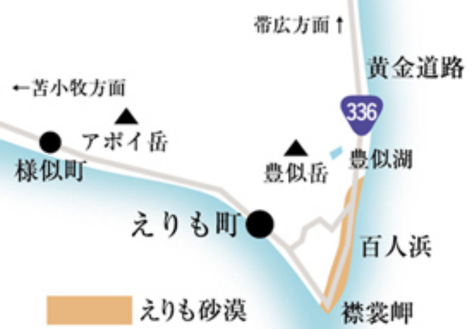
砂の飛ぶ荒れ地"えりも砂漠"を行くキャラバン。戦後間もない頃。

明治時代の初め、新政府の入植者奨励政策を受け、えりもにやって来た開拓民は住居や暖を取るための森林伐採を続けた。――そして、豊かな森は失われた。

風速一〇m以上の風が年間約三〇〇日以上吹き荒れる強風地帯。不毛の地は常に乾燥し、むき出しになった赤土を舞い上げた。いつからか"えりも砂漠"と呼ばれるようになった。

激しい風は小石を吹き飛ばし、女性はそれを避けるためにいつも頬被りをしていた。馬を引いて畑に向かうその姿はまるでアラビアの人のようだった。

強風に飛ばされた赤土は海にも降り注ぎ、雨による泥水は海に流れ出た。海は濁り、海底に堆積した赤土は昆布の根腐れを起こし、ドロ昆布と言われ売れなかった。ついに回遊するサケ・マスも寄り付かなくなり漁業は壊滅的となった。漁師は一気に生活苦へと追い込まれた。



えりもの大地も山も草木を失いはげ山に。

豊かな森は消え、海が死んだ。

えりも砂漠

宝の昆布がドロ昆布

強風と共に生きる。

300日 365日

憎い風。今は恵みの風。

風速一〇m

「ここはよ、砂漠だったんだ。婆ちゃんに嫁に来てもらったのはいいけどよ、こんなとこ住めん、って毎日泣いとった。それぐらい風と砂がひどくてな。メシを用意してもな、あっという間にごはんは砂だらけ。ホントに口の中でジャリジャリ言っとった。皆で町を出よう、って何度も話し合ったさ。でも皆えりもが好きだから、頑張って木を育て、昔のような森に戻そうって…」

こんな話を何度も聞かされた少年は現在孫に囲まれて、いつの間にか同じ話をしている。話ながら、抱いてくれた祖父のゴツゴツした厚皮でひび割れた手を思い出す。思わず、自分の手を見つめる。「まだまだまだじいちゃんにもオヤジにもかなわないなぁ……」男として尊敬し、何度も聞いた言葉を繰り返す。

「森はよ、海で生活するオレたちが守らないとダメなのよ。漁師だから森のことは知らん、では絶対にダメだ。オマエたちも海のお陰でメシ食えてるんだから、森を守らなきゃダメなんだ。"えりも砂漠"はもう二度と見たくない。あの苦しい想いはもう絶対したくない…」

祖父たちは何のために命をかけて森を育て守ったのだろうか。「風が強いからダメだ、なんて言い訳してたらできんかった。とにかくやってみようって。失敗しても何度でも挑戦したさ。でもな、あの厄介モノだったゴタ(雑海藻)が緑化の道を切り拓いてくれたんだ。何度種を蒔いてもぜぇんぶ風に飛ばされちまったけど、ゴタを被せたら、種を守ってくれてヨ、しかも肥料にもなった。何事もやってみないとわかんねぇもんだ」

祖父たちは子供たちのため、孫たちのために豊かな故郷を残したかった。だから何度挫折してもまた挑戦をつづけた。今なら少しわかる気がする。何故なら、今自分の孫を見て「こいつらのために故郷を守りたい」そう本気で思えるからだ。

半世紀以上が経ち、祖父たちが苦労して緑化を成功させた緑濃き森の中には、カッコウやウグイスが元気に囀る。祖父たちがやっとの思いで植樹したクロマツはもう四〇年以上、毎日強い風に耐え、祖父が死んだ今も必死に生き抜いている。

漁師たちは立ち上がった。

緑化

「昔は地獄、今は極楽。クロマツやカシワの古い木たちとはもう四〇年来の戦友よ。一緒にここで闘ってきた。朝におはよう言うて、今日も頑張ろうって話かけてやるんだ」祖父が晩年、よく言っていたことを思い出す。

えりもに緑が戻り、豊かな海が蘇った。しかし、厳しい自然環境は変わらない。だとするならば、わずか半世紀前のような「えりも砂漠」に戻る可能性だってある。だからこそ一日も手を休めることはできないのだ。祖父たちが父らに伝え、自分たちに伝えてくれた闘いの記憶がある限り、二度と同じ過ちはしないだろう。

厄介モノに救われた。

ゴタ

リヤカーをひきゴタを敷き詰めた。重労働の日々。

強風に対応する様々な暴風柵が試された。